

## 4. だいず

### ・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
11	アミスター20フロアブル	散布	収穫7日前まで	2回以内	
M3	キヒゲン	種子粉衣	は種前	1回	
1	(チオファネートメチル) トップジンM粉剤DL	散布	収穫14日前まで	4回以内	
	トップジンM水和剤	散布	収穫14日前まで	4回以内	
40+M1	フェスティバルC水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
1	ベンレート水和剤	散布	収穫前日まで	4回以内	
M3+1	ベンレートT水和剤20	種子粉衣	は種前	1回	
M3+1	ホーマイ水和剤	種子粉衣	は種前	1回	

### ・殺菌剤 (参考農薬)

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M3	キヒゲンR-2フロアブル	塗沫処理	は種前	1回	

### ・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
8*	(D-D) DC油剤	1) 全面処理 耕起整地後、縦横 30cm 間隔の基盤の目に切り 千鳥状に深さ 15~20cm に所定量の薬液を注入 し直ちに覆土鎮圧する。 2) 作条処理 は種又は植付前にあら かじめ予定された溝に 30cm 間隔に所定量の薬 液を注入し直ちに覆土 鎮圧する。	作付の 10~15 日前 まで	1回	
	D-D				
	テロン				
1	エルサン乳剤	散布	収穫7日前まで	2回以内	
1	スミチオン乳剤	散布	収穫21日前まで	4回以内	
1	(ダイアジノン) ダイアジノン粒剤3	土壌混和	は種時	1回	豆類(種 実)
	ダイアジノン粒剤5	散布	収穫30日前まで	4回以内	
3	トレボン乳剤	散布	収穫14日前まで	2回以内	
28	プレバソフロアブル5	散布	収穫7日前まで	2回以内	
1	ラグビーMC粒剤	全面処理土壌混和	は種前	1回	

・殺虫剤（参考農薬）

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	(ジノテフラン) アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	散布	収穫 7 日前まで	2 回以内	
1	スミチオン粉剤 3 DL	散布	収穫 21 日前まで	4 回以内	
3	トレボン粉剤 DL	散布	収穫 14 日前まで	2 回以内	豆類(種 実)

- 注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。
- 注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。
- 注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
紫 斑 病	は 種 前	1. 無病種子をは種する。 2. ベンレート T 水和剤 20 を乾燥種子 1 kg 当り 4 g、ホーマイ水和剤は 5 g、キヒゲンは 10 g のいずれかを粉衣する。  [参考農薬] 1. キヒゲン R - 2 フロアブルの原液を乾燥種子 1 kg 当り 20ml、塗沫処理する。	1. 収穫後発病残さを取り除く。 2. 結実期に雨が多いと多発する。 3. 薬剤は葉によく付着するように散布する。 4. キヒゲン、キヒゲン R - 2 は水産動物に対して影響が強いので注意する。 5. 薬剤耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用は避ける。
	開 花 終 期 粒 肥 大 初 期 (米粒大) (開花後 2 週間～ 4 週 間)	1. トップジン M 粉剤 DL を 10 a 当り 4 kg 散布する。 2. トップジン M 水和剤、アミスター 20 フロアブル、ベンレート水和剤の 2,000 倍液のいずれかを 10 a 当り 200ℓ 散布する。	6. チオファネートメチル耐性菌は、ベノミルにも耐性を示すため、耐性菌の発生地域では、トップジン M 及びベンレートの使用を控える。 7. アミスターは浸透性を高める展着剤の添加により薬害を生ずる場合があるので、添加しない。また、りんごの一部品種及び幼苗期の非結球レタスに対して薬害を生ずる恐れがあるので注意する。
茎 疫 病	開花期頃の 灌水前	1. フェスティバル C 水和剤の 600 倍液を 10a 当り 100ℓ 散布する。	1. 本病は停滞水によって発病が助長されるため、灌水をしても停滞水が 1～2 日間で解消するように管理する。 2. 本剤は茎葉部からの吸収移行性及びガス化による効果はないので、散布むらのないよう均一に散布する。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
黒とう病	生育全期間	1. 発病地では連作を避け、常に早期発見に努め、発見次第被害株を抜き取り焼却する。	1. あずき、いんげんには発病しない。
モザイク病 萎縮病 (褐斑病)	は種前 生育初期	1. 抵抗性品種を利用する。 2. 無病種子を用いる。 3. 発病株を早期に抜き取る。 4. アブラムシ類の防除を徹底する。	
ダイズシストセンチュウ	は種前	1. 基肥(堆肥、窒素、リン酸、加里)を十分施す。 2. ラグビーMC粒剤を播種前に10a当り20kg散布し、10~20cmの深さに土壌と十分に混和する。 3. D-D剤(DC油剤、D-D、テロン)を10a当り20ℓ注入する。	1. 連作を避ける。 2. 開花直前の生育が悪い場合は、追肥として粒状石灰窒素を10a当り20kg株元に施す。 3. ラグビーは水産動物に対する影響が大きいので、河川、湖沼及び養魚池に飛散、流入するおそれがあるほ場では使用しない。 4. D-D剤は以下に注意する。 (1) 作付3~4日前に畑を耕起して十分にガス抜きをする。 (2) 低温時は処理から作付けまでの期間を1週間程度長くする。 (3) 人畜へガスの暴露がないよう、作業中の風向きや、くん蒸中のほ場への立ち入り防止に注意する。
タネバエ	は種時	1. ダイアジノン粒剤3を10a当り5kg、覆土前に種子と同位置に散布する。	1. は種期が早いと多発する。
アブラムシ類	生育初期~ 子実肥大初期	1. エルサン乳剤、又はスミチオン乳剤の1,000倍液を10a当り200ℓ散布する。	
ダイズサヤ タマバエ	開花終期 (着莢初期)	[参考農薬] 1. スミチオン乳剤、又はトレボン乳剤の1,000倍液を10a当り200ℓ散布する。 2. トレボン粉剤DLを10a当り4kg散布する。	1. 発生の多い場合は10日後に追加散布する。 2. 落花して間もない若い莢に産卵する。また、被害はほ場周辺部に多い。 3. 薬剤が莢、茎に付着するように散布する。 4. <b>トレボンは蚕毒及び魚毒に特に注意する(特別指導事項参照)。</b>
マメシンクイガ	8月中旬~ 9月上旬 (幼莢期~ 子実肥大中期)	1. スミチオン乳剤、トレボン乳剤の1,000倍液、プレバソンプロアブル5の4,000倍液のいずれかを10a当り200ℓ散布する。 2. ダイアジノン粒剤5を10a当り4~6kg散布する。	1. 前年に被害が多かった大豆連作圃場等で、発生が多く見込まれる場合は10日間隔で2~3回散布する。 2. 有効な散布時期は薬剤によって異なる(表1)。また、散布時期は作物の生育ステージよりも本種の発生時期を基準とする必要があると考えられることから、各地域

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
			の本種発生時期（表2）を参考に、薬剤の種類別に散布時期を決定する。 3. 乳剤は、莢、茎に付着するように散布する。 4. 粒剤は株の上から均一に散布する。 5. トレボンは蚕毒及び魚毒に、プレバソンは蚕毒に特に注意する（特別事項参照）。
カメムシ類	8月中旬～ 9月上旬 (幼莢期～ 子実肥大中 期)	1. ダイアジノン粒剤5を10a当り4～6kg散布する。 [参考農薬] 1. スミチオン乳剤、トレボン乳剤の1,000倍液、ジノテフラン顆粒水溶剤（アルバリン、スタークル）の2,000倍液のいずれかを10a当り200l散布する。 2. スミチオン粉剤3DLを10a当り4kg散布する。	1. 発生の多い場合は10日間隔で2～3回散布する。 2. 粒剤は株の上から均一に散布する。 3. アルバリン、スタークルは蚕毒に、トレボンは蚕毒及び魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。

表1 マメシクイガに対する各薬剤の散布適期

薬剤	散布時期別防除効果		
	成虫発生盛期	産卵盛期	幼虫発生初期
プレバソンフロアブル5	○	○	△
トレボン乳剤	○	○	△
スミチオン乳剤	×	△	○

○：効果あり △：効果はあるがやや低い ×：効果が低い

表2 各地域におけるマメシクイガの発生時期

